

## 苦しいときだからこそ

これは、わたしが父から聞いた話です。

わたしの父は、阪神・淡路大震災で被災しました。そのときのことを話します。

阪神・淡路大震災は、平成七（一九九五）年一月十七日の午前五時四六分に兵庫県淡路島北部沖の明石海峡を震源として発生したマグニチュード七・三の大地震の被害です。

被害は、死者六、四三四名、負傷者四三、七九二名、避難人数三十万名以上という、非常に大変な状況でした。

幸い生き残ることができた父たちですが、鉄道や道路、生活に必要な電気や水道、ガスや電話などのライフラインは止まってしまい、広い範囲で機能しなくなりました。

このような状況では、水を手に入れることも簡単なことではありません。よく暑い夏にのどがかわくことがあります。そんな生易しいものではなく、地面にある水たまりの水でさえ飲みたいと思うほどの、のどのかわきだったそうです。水は、生命の源であり、飲み水の確保は、生きるための第一

条件<sup>じょうけん</sup>でした。

電気は一週間ほどで復旧<sup>ふっきゅう</sup>しましたが、ガスと水道の復旧は  
おくれました。人々は、給水車を心待ちにして、少しでも早  
く水を手に入れたいと、ただその一心で待ち続けていました。  
ようやく、給水車が見えると、父は一目散<sup>いちもくさん</sup>に給水車の方へ  
走り出しました。周りの大人たちも給水車のそばへかけよっ  
ていきます。

給水車が到着<sup>とうちやく</sup>すると、おし合い、へし合い、われ先にと人  
々が集まりました。しかし、しばらくすると、給水車の前に  
は一本の長い列ができたのです。

だれもが生きるために必死でしたが、後から来た人たちは  
長い列の後ろに並<sup>なら</sup>んだのです。自分さえよければそれでいい  
という人は一人<sup>ひとり</sup>もいませんでした。



水の補給ほきゅう以外にも、入浴や、たき出しの配布はいふ、安否確認あんびかくにんのための公衆電話こうしゅうでんわ、毛布もうふや衣類の配給、避難所ひなんじょのトイレなどで、並ばなければならないこともあったそうです。

一方で、バス乗り場では、次のような話もあったそうです。街灯もない中、月明かりだけをたよりに、ここえそうな体をふるわせながらみんながバス乗り場に並んだそうです。父は、早めにバスに乗車できましたが、後ろの方から言い争いが聞こえてきました。

「おい、もっとつめればたくさんの方が乗れるだろう。」

「これ以上は先にいけないよ。」

「そんなに間が空いているじゃないか。さっさと前に行ってくれ。」

「ここには小さな子どもがいるんだ。これ以上つめられない。」  
それを聞いて、父はとても複雑ふくざつな思いになったそうです。



このような大震災が起こったとき、親をなくした人、子どもをなくした人、家を失った人など、さまざまな状況の中で、みんな並んだのでした。

「並ぶことはみんなが生きること。」

父は、そう話してくれました。

みなさんは、わたしたちの住む日本で、秩序ちつじょを守る行動が、みんなが苦しいときに行われていることを知って、どう考えますか。